

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

1日

仏滅 張

旧5月6日

火曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ひ こく む う に よ に ん
彼国無有女人

「彼の国には女人有ること無し」

「彼の国」とは、日月淨明德如来の国のこと。

その国には女人がいないというのです。

さらに地獄・餓鬼・畜生・阿修羅等と同列に女人が諸難に含まれるというのです。

仏の徳により難が消えると考えすることはできませんが、誰もが仏に成れると説く法華経からすると女人を難とすることには疑問が生じます。

『薬王菩薩本事品』は他の品（章）と編纂者が異なるといわれ、違和感を感じる箇所です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

2日

大安 翼

旧5月7日

水曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ごじゅ

こだい

じん

いつ

せん

どう

其樹去臺 尽一箭道

「一箭道ごとに楼閣があり天人が仏を供養した」

「臺」とは楼閣のこと。

「箭」とは、矢の竹の部分のこと。

弓で矢を射て届く距離が「一箭道」です。

一箭道ごとに七宝の樹と楼閣があり、菩薩や声聞が坐り、楼閣の上には百億もの天人が伎楽を奏で、仏を供養していました。

仏教以前に広まっていたバラモン教では天上界に生まれ変わることが理想で、その天人が仏の供養を繰り返すことで仏教優位を示したのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

3日

赤口 井

旧5月8日

木曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

いつさい しゅ じょう き けん ぼ さつ

一切衆生喜見菩薩

「一切の衆生を喜ばせることを見る菩薩」

一切の衆生を喜ばせることを見る菩薩という名から、人々を救い安穩を与えたいという思いが強い菩薩であることがわかります。

藥王菩薩の前世である一切衆生喜見菩薩は、日月淨明德仏のもとで自ら願って苦行を積み、法華經を聞き、「現一切色身三昧（相手の状態に応じた姿となり自在に法を説く力）を得ました。

その力によって花や香りで仏を供養し、さらに自らの身を燃やし仏と法華經に供養をしたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

4日

先負 房

旧6月10日

金曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

げん いっ さい しき しん ざんまい

現一切色身三昧

「相手に応じて姿を変え自由に説く力」

「現一切色身三昧」とは、相手の状況に応じて姿を変え、相応しい言葉や振舞いを用いて教えを与える力です。

喜びを分かち合いながら教えるのが相応しい者、厳しく叱って教えた方が身に付く者、教えを説く相手の状況は千差万別です。

自分の感情に左右されずに、相手の立場や気持ちに心を寄せて導くのは難しいことです。

法華経の修行で身に付けたいものです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

5日

仏滅 心

旧6月11日

土曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

此し香こう六ろく銖しゅ 価け直じき娑しや婆ば世界せかい

「貴い香を供養してもまだ足りない」

一切衆生喜見菩薩は、堅くて黒い栴檀という香木を細かく碎き、その香りを虚空に降らせ、法華経を聞いて現一切色身三昧を得た感謝の思いをあらわしました。

香の重さが六銖(約三・五グラム)ほどでも、その価値は娑婆世界全体に匹敵するということです。そのくらい貴い香を日月淨妙仏に供養してもまだ不足である一切衆生喜見菩薩は、自分の身をもって供養するしかないと考えたのでした。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

6日

大安 尾

旧6月12日

日曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

こう

ゆ

ず

しん

香油塗身

「香油を身に塗り灯し仏を供養した」

身をもつて仏に供養したいと願った一切衆生喜
見菩薩は、栴檀（せんたん）・薰陸（くんろく）・兜楼婆（とるば）・
畢力迦（ひつりきば）・沈水（じんすい）・膠香（きようこう）・瞻蔔（せん
ぼく）などの香油を飲み、また身に塗り、天人の衣
をまとい、千二百歳という永い時間自分の身を燃
やして灯明となり、八十億恒河沙という量り知れ
ない数の世界を照らしました。
それほどまでに、日月淨明徳仏から受けた恩が大
きかったことを物語っています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

7

日

小暑

赤口 箕

旧6月13日

月曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ぜ みよう しん ほう

く よう によ らい

是名真法

供養如来

「これを真の法を以て如来を供養する者と名づく」

私たちが仏さまの恩に報いたいと願ったとしても自分の身を燃やそうとは思わないでしょう。焼身という強烈な行為にとられず、仏さまの教えを弘め世の中を明るく照らすためには苦勞を惜しまないと考えてはいかがでしょう。先ずは、仏さまの恩を知り、自分に教えを弘める力を蓄えなければ何も始まりません。香油を飲み、身に塗るといふのは、恩を知り、力を蓄えることの喩えであると思います。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

佛壽四万二千劫。菩薩壽命亦等。彼国無有女人。地獄。餓鬼。畜生。阿脩羅等。及以諸難。地平如掌。

瑠璃所成。宝樹莊嚴。宝帳覆上。垂宝華旛。宝瓶香炉。周徧国界。七宝為台。一樹一台。其樹去台。

尽一箭道。此諸宝樹。皆有菩薩声聞。而坐其下。諸宝台上。各有百億諸天。作天伎樂。歌歎於佛。以

為供養。爾時彼佛。為一切衆生喜見菩薩。及衆菩薩。諸声聞衆。說法華經。是一切衆生喜見菩薩。樂

習苦行。於日月淨明徳佛法中。精進經行。一心求佛。滿万二千歲已。得現一切色身三昧。得此三昧已。

心大歡喜。即作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞。法華經力。我今當供養。日月淨明徳佛。及法

華經。即時入是三昧。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。細抹堅黑栴檀。滿虛空中。如雲而下。

又雨海此岸栴檀之香。此香六銖。徧直娑婆世界。以供養佛。作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖

以神力。供養於佛。不如以身供養。即服諸香。栴檀薰陸。兜樓婆畢力迦。沈水膠香。又飲瞻蔔。諸華

香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明徳佛前。以天宝衣。而自纏身已。灌諸香油。以神通力願。

而自然身。光明徧照。八十億恒河沙世界。其中諸佛。同時讚言。善哉善哉。善男子。是真精進。是名

真法。供養如來。若以華香瓔珞。燒香抹香塗香。天繒旛蓋。及海此岸栴檀之香。如是等種種

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

8日

先勝 斗

旧6月14日

火曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

お じょう とく おう け

於浄徳王家

「妙莊嚴王と浄徳夫人の家に生まれ変わる」

「浄徳王の家」とは『妙莊嚴王本事品第二十七』に登場する妙莊嚴王と浄徳夫人の家です。

一切衆生喜見菩薩は後の世に、王家の息子の浄蔵として生まれ変わります。

『妙莊嚴王本事品』には、浄蔵が弟の浄眼と共に雲雷音宿王華智仏に帰依し、父王を法華經の信仰に導いた功德によって、浄蔵は藥王菩薩、浄眼は藥上菩薩として生まれ変わったことが説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

9日

友引 女

旧6月15日

水曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

復聞ぶもんぜ是法華経ほけきよう八百千万億那由他はつびやくせんまんのくなゆた

けんから

びんばら

あしゆくばとうげ

甄迦羅

頻婆羅

阿閼婆等偈

「法華経を聞くこと無限の数に至った」

法華経を聞いて、よく解り、人に説き、救ったから、もう十分だというものではありません。

何度も聞いて、読んで、学ぶたびに新たな気づきを得ると、教えの内容が膨らんでくるようにさえ思えるものです。

「八百千万億那由他 甄迦羅 頻婆羅 阿閼婆」とはどれも非常に大きな数のことで、ほぼ無限であることを意味しています。

それほどに仏さまの教えは有難いのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

10日

先負 虚

旧6月16日

木曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

ゆうげんじんきみよう

容顔甚奇妙

がしやくぞう くよう

こうみようしようじつぽう

光明照十方

こんぶ げんしんごん

我適曾供養

今復還親近

「何度生まれ変わっても同じ仏に仕える深い縁」

一切衆生喜見菩薩は、かつて日月淨妙徳仏に仕え、生まれ変わった際には妙莊嚴王の息子として雲雷音宿王華智仏のもとで父を導き、そしてまた生まれ変わり日月淨妙徳仏のもとに戻り親しく仕えたというのです。

何度生まれ変わっても同じ仏さまにお仕えするほど深い縁でつながっているということです。

日月淨妙徳仏の尊顔の清らさと十方を照らす光明がその仏縁をつないでいるのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

11日

仏滅 危

旧6月17日

金曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

が い ぶつ ぼう ぞく るい お によ

我為仏法 囑累於汝

「我が仏法を汝に託す」

日月淨明德仏は一切衆生喜見菩薩に、「自分は説くべきことを説いたので涅槃に入る。滅後の弘教はお前に託すので、自分の遺骨を供養する千の塔を建てるように」と告げられました。

塔を起てるということは、仏の徳を讃え、その御心になうよう普く世間に教えを伝え、多くの人々を帰依させるということです。

深い縁でつながっているからこそ、一切衆生喜見菩薩に後事を託したことが伝わってきます。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

12

日

大安 室

旧6月18日

土曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

か めつ い ご

しゅうしゅ しやり

火滅已後 收取舍利

「仮想した遺骨を收取する」

一切衆生喜見菩薩は日月淨妙徳仏の滅度を心から悲しみ、栴檀の香木を積んで薪として仏の遺骸を荼毘に付しました。

火が消えた後、遺骨を八万四千の骨壺に納め、塔を建て供養しました。

嚴かに莊嚴された塔には、尊い教えが広く広まるようにとの願いが込められています。

「火滅已後 收取舍利」という経文は、今でも火葬の後、収骨する際の回向文に用いられています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

13日

赤口 壁

旧6月19日

日曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ねんひやくふくしょうごんひ

しちまん にせんざい

燃百福莊嚴臂

七万二千歳

「百福莊嚴の臂を燃やすこと七万二千年」

一切衆生喜見菩薩は日月淨妙徳仏の供養のために八万四千の塔を建てましたが満足できず、自らの臂を七万二千年間燃やし続けました。

身をもって難行苦行し、世の中を照らすように教えを弘め続けることの尊さを表しています。

「百福莊嚴の臂」とは、一切衆生喜見菩薩の徳の高さと端正な姿を示し、臂を燃やした燈火に照らされた無数の人々を教えに導いた功德の大きさを表しているのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

14日

先勝 奎

旧6月20日

月曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

がしや りようひ

ひつ とう とく ぶつ

我捨兩臂 必当得仏

「兩臂を失つても必ず仏になる」

一切衆生喜見菩薩は、兩臂を失つても仏と同じ金色の体を得て、臂も元通りになるだろうと、歎き悲しむ人々に告げました。

身を捧げるほどの苦勞を重ね、教えを弘め、仏の境界に近づき福德と智慧を得たからこそ、金色の体を得て、臂も元通りになると確信しました。

周囲からは大変な苦勞に見えても、本人にとっては仏に近づけるのだから苦しいことではなく有難いことであり、徳を積む行為なのです。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

於淨德王家。結跏趺坐。忽然化生。即為其父。而說偈言 大王今當知 我經行彼處 即時得一切 現諸身三昧 勤行大精進 捨所愛之身 說是偈已。而白父言。日月淨明德佛。今故現在。我先供養佛已。得解一切衆生。語言陀羅尼。復聞是法華經。八百千萬億那由他。甄迦羅。頻婆羅。阿閼婆等偈。大王。我今當還供養此佛。白已。即坐七宝之台。上昇虛空。高七多羅樹。往到佛所。頭面礼足。合十指爪。以偈讚佛 容顏甚奇妙 光明照十方 我適曾供養 今復還親近 爾時一切衆生喜見菩薩。說是偈已。而白佛言。世尊。世尊猶故在世。爾時日月淨明德佛。告一切衆生喜見菩薩。善男子。我涅槃時到。滅盡時至。汝可安施牀座。我於今夜。當般涅槃。又敕一切衆生喜見菩薩。善男子。我以佛法。囑累於汝。及諸菩薩大弟子。并阿耨多羅三藐三菩提法。亦以三千大千七宝世界。諸宝樹宝台。及給侍諸天。悉付於汝。〔略〕火滅已後。收取舍利。作八万四千宝瓶。以起八万四千塔。高三世界。表刹莊嚴。垂諸幡蓋。縣衆宝鈴。爾時一切衆生喜見菩薩。復自念言。我雖作是供養。心猶未足。我今當更。供養舍利。便語諸菩薩大弟子。及天。龍。夜叉等。一切大衆。汝等當一心念。我今供養。日月淨明德佛舍利。作是語已。即於八万四千塔前。然百福莊嚴臂。七万二千歲。〔略〕而今燒臂。身不具足。于時一切衆生喜見菩薩。於大衆中。立此誓言。我捨兩臂。必當得佛。金色之身。若實不虛。令我兩臂。還復如故。作是誓已。自然還復。由斯菩薩。福德智慧。淳厚所致。當爾之時。三千大千世界。六種震動。天雨宝

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

15日

友引 婁

旧6月21日

火曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

こん やく おう ぼ さつ ぜ や

今藥王菩薩是也

「かつての一切衆生喜見菩薩が今の藥王菩薩」

お釈迦さまは、かつての一切衆生喜見菩薩が今の藥王菩薩であると宿王華菩薩に告げました。

仏に成るためには永い修行を重ね、幾度も生まれ変わり、身をもって仏に仕え、教えを弘めなければならぬことを一切衆生喜見菩薩の物語を通して伝えられたのです。

もし仏に成りたいと発心したなら、努力を惜しまず、自分の身を犠牲にしても、仏の恩に奉じる覚悟が必要だということです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

16日

先負 胃

旧6月22日

水曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

じゅう ゆ

十喻

「法華経最勝の喻え」

十種の最勝のものを法華経に喻えたもの。

①水喻 〓 諸水と海 ②山喻 〓 諸山と須弥山 ③

衆星喻 〓 衆星と月天子 ④日光喻 〓 闇と太陽

⑤輪王喻 〓 小王と転輪聖王 ⑥帝釈喻 〓 三十三

天と帝釈天 ⑦梵王喻 〓 一切衆生と大梵天王

⑧四果辟支仏喻 〓 凡夫と辟支仏 ⑨菩薩喻 〓 声

聞・辟支仏と菩薩 ⑩仏喻 〓 諸法と仏

この十種の喻えをもって、法華経が一切経中の経王であることを示したのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

17

日

仏滅 昂

旧6月23日

木曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

のうげ いっさい しやうじ し ばく

能解一切 生死之縛

「よく一切の生死の縛を解かしめたもう」

「生死之縛」とは、世の中の変化や自分の境遇によつて、悩んだり悲しんだりして心の自由を失い一生を終えてしまうことです。

法華経はその縛りを解くための教えです。

渇きを満たす池のように、温もりを与える火のように、裸の者に衣を与えるように、商人が主を得たように、子が母を得たように、渡りに船を得たように、病人が医療を得たように、闇に燈火を得たようにと様々な喩えが挙げられています。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

18日

大安 畢

旧6月24日

金曜

妙法蓮華經常藥王菩薩本事品第二十三

じんぜ によしん

尽是女身

ごふぶ じゅ

後不復受

「後世で女性に生まれ変わることはない」

この『藥王菩薩本事品』を聞いて、よく受持した女性は、生まれ変わった後にまた女性に生まれることはないと言われています。

大乘を学び、菩薩の行を積み、仏に成る上においては、男女の区別を超越して静かな境地に達するのであるから、女人に生まれるか否かということにこだわる必要はないということです。

女人成仏を説く法華經からすると違和感のある個所ではあります。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

19日

赤口 鶯

旧6月25日

土曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ご ご ひやく さい ちゅう

後五百歳中

「お釈迦さま滅後の第五の五百年」

『大集経』には、お釈迦さま滅後の時代を五つに区分し仏教の変遷を予言しています。

最初の五百年は「解脱堅固（仏法が盛んで智慧を得て悟りを開き解脱する者が多い時）」、第二は「禅定堅固（禅定を保つ者が多く仏法の持続される時）」、第三を「多聞堅固（実践が次第に衰えるとき時）」、第四を「造寺堅固（熱心に寺院建立をなす者が多い時）」、そして第五の「鬭諍堅固（仏法が廃れ邪見を増す時）」は末法の初めとされています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

20日

先勝 参

旧6月26日

日曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

そく おう あん らく せ かい あ み だ ぶつ

即往安楽世界 阿弥陀仏

「阿弥陀仏の安楽世界に往く」

女人も法華経によって修行すれば、阿弥陀仏の安楽世界に生まれ変われると説かれています。

『化城喻品第七』では、阿弥陀仏は大通智勝仏のもとで、釈迦牟尼仏の兄弟弟子として修行して悟りを得ました。

阿弥陀仏も法華経において悟りを得たのであるから、阿弥陀仏の安楽世界も法華経に内包されており、法華経を修行すれば安楽世界をこの土に実現できるという事なのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

21日

友引 井

旧6月27日

月曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

か ふ のうしやう

火不能焼

すい ふ のうひやう

水不能漂

「火に焼かれることも洪水で漂流することもない」

自分が仏の悟りに近づき、他者も同じ道に入れる
という働きによって得られる功德は無限です。

その功德は誰にも邪魔ができないほど強く、火を
もって物を焼くこともできず、水の上を漂流する
こともない、千人の仏たちが説き続けても尽くす
ことができないほどのものであると、お釈迦さま
がお褒めになっっています。

この経文は火災・水害除けの祈願文として用いら
れています。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

今藥王菩薩是也。其所捨身布施。如是無量。百千萬億。那由佗數。宿王華。若有發心。欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能然手指。乃至足一指。供養佛塔。勝以國城妻子。及三千大千國土。山林河池。諸珍宝物。而供養者。若復有人。以七寶滿。三千大千世界。供養於佛。及大菩薩。辟支佛。阿羅漢。是人所得功德。不如受持。此法華經。乃至一四句偈。其福最多。宿王華。譬如一切川流江河。諸水之中。海為第一。此法華經。亦復如是。於諸如來。所說經中。最為深大。

〈略〉

宿王華。此經能救。一切衆生者。此經能令。一切衆生。離諸苦惱。此經能大饒益。一切衆生。充滿其願。如清涼池。能滿一切。諸渴乏者。如寒者得火。如裸者得衣。如商人得主。如子得母。如渡得船。如病得醫。如暗得燈。如貧得寶。如民得王。如賈客得海。如炬除暗。此法華經。亦復如是。能令衆生。離一切苦。一切病痛。能解一切。生死之縛。若人得聞。此法華經。若自書。若教人書。所得功德。以佛智慧。籌量多少。不得其辺。若書是經卷。華香瓔珞。燒香抹香塗

〈略〉

能受持者。尽是女身。後不復受。若如來滅後。後五百歲中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿弥陀佛。大菩薩衆。圍繞住處。生蓮華中。宝座之上。不復為貪欲所惱。亦復不為。瞋恚愚痴所惱。亦復不為。憍

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

22日

大暑

先負 鬼

旧6月28日

火曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

がめつどご ごご ひやくさいちゅう

我滅度後 後五百歲中

こうせんるふ お えんぶ だい

広宣流布 於閻浮提

「末法において法華經流布を託す」

お釈迦さまの滅後二千年からは、仏法が廃れ邪見が増すは末法の初めだとされています。

世の中が荒れる末法において、私たちが暮らしている世界(閻浮提)に法華經を広めるようにとお釈迦さまは宿王華菩薩に託しました。

法華經が広まらなければこの世界は悪魔の世になり、逆に法華經が広まれば仏の国になるのであるから、大きな苦勞があっても弛まずに努めるようにと鼓舞されたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

23日

仏滅 柳

旧6月29日

水曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

にやくにんうびよう

とくもんぜきよう

若人有病

得聞是経

びようそくしやうめつ

ふろうふし

病即消滅

不老不死

「この教えを聞くことで仏のいのちを得る」

『如来寿量品第十六』に「良薬を今留めてここにおく」とあります。

法華経は全ての人の心の病を治療する良い薬であるということです。

「病即消滅」の「即」は、「すぐに」ではなく「まさしく」という意味です。

病を得たとしても法華経を聞き信じていれば、間違いなく仏さまの智慧を得て仏さまと共に生き続けられるということです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

24日

大安 星

旧6月30日

木曜

妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三

ひつとうしゅそう

ざ お どうじよう

は しよ まぐん

必当取草

坐於道場

破諸魔軍

「草を取って道場に坐して諸の魔軍を破す」

「草を取って道場に坐して諸の魔軍を破す」とはお釈迦さまが菩提樹の下の石の上に草を敷いて坐り、悟りを開かれたことを指しています。お釈迦さまが悟りに至ろうとしたとき、そうはさせまいと魔物たちが邪魔をしました。魔物とは「迫害」と「誘惑」を喻えた表現です。法華経を受持し教えを弘めようとする際には、外からの迫害と自分の心の内からの誘惑が魔物のように邪魔をするのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

25日

赤口 鬼

旧7月1日

金曜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

いっ さい しゅじょう ご ん だ ら に

一切衆生語言陀羅尼

「人々の言葉の奥に潜む意をよく察し、救う力」

「一切衆生語言陀羅尼」とは、一切衆生の言葉の奥に潜む思いをよく察し、そして救う力です。

藥王菩薩が過去世において身を燃やし仏に供養したという話を聞いた八万四千の菩薩たちは「一切衆生語言陀羅尼」を得ました。

大きな仕事は一人の力ではできません。

多くの人が力を合わせて事が成るのです。

一人ひとりの気持ちを理解して、皆が満足できるように結果に導く指導者に必要な力です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

26日

先勝 柳

旧7月2日

土曜

妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四

じょうけ

しゆく

おう

ち

ぶつ

浄華宿王智仏

「釈尊は浄華宿王智仏の仏国土を照らした」

浄華宿王智仏は蓮華のようにけがれない星宿王によって開かれた神通を有する仏さまです。お釈迦さまは眉間の白毫から光を放ち、東方の浄華宿王智仏の仏国土を照らしました。量り知れない数の諸仏は皆、同じことを悟り、同じように衆生を救済しています。お釈迦さまが他の仏国土を照らし、他の仏国土の諸仏と行き来するのは自然なことなのです。ともに照らし合い安穩な世界を築くのです。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

27

日

友引 星

旧7月3日

日曜

妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四

みよう おん ぼ さつ

妙音菩薩

「東方の淨華宿王智仏の仏国土から來訪した菩薩」

「妙音」とは、ガラガラ、ゴロゴロなどの擬声語を意味し、雷鳴とする説や、口ごもるような音とされ異言語を話す異邦人を指す説もあります。

東方の淨華宿王智仏の仏国土から、お釈迦さまが法華經の説法をする靈鷲山を訪ねてきたことから、異邦人説もうなずけるところです。

他の国の異文化も理解し合い、共に安穩な仏国土を築き、皆が幸せになるよう救いの手を差し伸べてくれる菩薩です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

28日

先負 張

旧7月4日

月曜

妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四

じゅう ろく

さん

まい

十六三昧①

「妙音菩薩が得た十六の三昧」

妙音菩薩が得た十六の三昧を紹介します。

①妙幢相三昧：総大将の幢（はた）のように、法華経が仏の本意＝幢であることを体得する境地

②法華三昧：法華経を深く信じ、身に行い、終始一貫する境地

③浄徳三昧：増上慢や自己中心の心がなく、浄らかな徳を具えた境地

④宿王戲三昧：優れた徳が具わり、自由自在に人々を救える境地

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

我滅度後。後五百歲中。広宣流布。於閻浮提。無令斷絶。惡魔。魔民。諸天。龍。夜叉。鳩槃荼等。得其便也。宿王華。汝當以神通之力。守護是經。所以者何。此經則為。閻浮提人。病之良藥。若人有病。得聞是經。病即消滅。不老不死。宿王華。汝若見有。受持是經者。應以青蓮華。盛滿抹香。供散其上。散已。作是念言。此人不久。必當取草。坐於道場。破諸魔軍。當吹法螺。擊大法鼓。度脱一切衆生。老病死海。是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是。生恭敬心。說是藥王菩薩本事品時。八万四千菩薩。得解一切衆生語言陀羅尼。多宝如來。於宝塔中。讚宿王華菩薩言。善哉善哉。宿王華。汝成就不可思議功德。乃能問。釈迦牟尼佛。如此之事。利益無量一切衆生。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

29日

仏滅 翼

旧7月4日

火曜

妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四

じゅう ろく さん まい

十六三昧②

「妙音菩薩が得た十六の三昧」

妙音菩薩が得た十六の三昧を紹介します。

⑤ 無縁三昧：縁のない者に進んで手を差し伸べようとする境地。

⑥ 智印三昧：深い智慧で衆生の心を感化しようと常に念じる心境

⑦ 解一切衆生語言三昧：一切衆生の欲するところを見通し教えを説く境地

⑧ 集一切功德三昧：教えの功德は自他共に仏に成ると集中している境地

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

30日

大安 軫

旧7月5日

水曜

妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四

じゅう ろく さん まい

十六三昧③

「妙音菩薩が得た十六の三昧」

妙音菩薩が得た十六の三昧を紹介します。

⑨清浄三昧：煩惱を打ち払い清浄の身を保とうと統一している境地

⑩神通遊戯三昧：執着しない自由自在な心境を保つこと集中にする境地

⑪慧炬三昧：明るい灯火のように智慧の光で世の中を照らす境地。

⑫莊嚴王三昧：優れた仏の徳を身につけ人々を感化しようとする境地

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

7月

31日

赤口 角

旧7月6日

木曜

妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四

じゅう ろく さん まい

十六三昧④

「妙音菩薩が得た十六の三昧」

妙音菩薩が得た十六の三昧を紹介します。

⑬ 浄光明三昧：浄らかな光明で身を輝かせ周囲を浄化する境地

⑭ 浄蔵三昧：心を浄きよらかにしたいと念願し努力する境地

⑮ 不共三昧：仏の境界に達する理想を固く心に念じて励む境地

⑯ 日旋三昧：太陽の如くすべてを生かそうと常に努力する境地

妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四

爾時釈迦牟尼佛。放大人相。肉髻光明。及放眉間白毫相光。徧照東方。百八萬億。那由佗。恒河沙等。諸佛世界。過是數已。有世界。名淨光莊嚴。其国有佛。号淨華宿王智如來。応供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。為無量無辺。菩薩大衆。恭敬圍繞。而為説法。釈迦牟尼佛。白毫光明。徧照其国。爾時一切淨光莊嚴國中。有一菩薩。名曰妙音。久已植衆徳本。供養親近。無量百千萬億諸佛。而悉成就。甚深智慧。得妙幢相三昧。法華三昧。淨徳三昧。宿王戲三昧。無縁三昧。智印三昧。解一切衆生語言三昧。集一切功徳三昧。清淨三昧。神通遊戲三昧。慧炬三昧。莊嚴王三昧。淨光明三昧。淨蔵三昧。不共三昧。日旋三昧。得如是等。百千萬億。恒河沙等。諸大三昧。